

20代、終わりなき葛藤

声なき SOS

福井のヤングケアラー



⑧

「男手があると嬉しい。助かるよ」と母がほほえむ。東京で暮らす20代のマモル(仮名)は、福井県内の実家に数カ月ぶりに帰り、脳に障害のある妹の入浴を介助した。穏やかな顔を見てみると、こころじいになってかわいいと思つた。

父と離婚した母は50代半ばになる。同居する姉は今後の金づかき任せるわけにもいかない。「好きな仕事を辞めてでも福井に戻るべきじゃないか」。年齢を重ね、心の葛藤が大きくなるのを

感じる。

生まれつき会話や歩くことができない妹のため、中学生の頃からおむつ交換や入浴、食事といった世話を手伝ってきた。「家族を守るのは当たり前」と考え、負担だと感じたことはない。高校卒業後、興味のあった仕事に就くため県外の専門学校に進んだ。学費は母が「好きな道に進みなさい」と用意してくれた。第一希望だった東京の企業に採用された。休日には友人と飲み会に出掛けたり



ヤングケアラーの多くが18歳以降も家族や自身の将来について悩みを抱き続ける＝福井市の福井大文京キャンパス(写真と本文は関係ありません)

家族か夢か、岐路に直面

旅行したり、「ひく普通

まじのなごい。ヤングケアラーは「18歳未満の子でも」とされ、学校との関わりや見守り支援の観点で問題が浮きあがっている。これに対し、葛藤を抱える子どもの側面が強調され、議論で切り捨てられてしまつ」と懸念を示し、幅広い年代を含めた「若者ケア」について表現を提唱する。全国に先駆けて昨年6月に専用の相談窓口を開設した福井市も、支援対象を子ども・若者ケアラーとして、20代を支える姿勢を前面に出す。きっかけとなったのが2019年に同市内で起きた事件。20代女性が孤立無援の状態で認知症の祖母をケアし続け、苦悩の末に殺害した。市の担当者は「二度と悲しい事件を繰り返さない」という反省が、市の施策の前提にある。当事者のライフステージに合わせた切れ目のない支援が必要だ。(宮崎翔央)

家族に申し訳ない」「罪悪感がある」。ヤングケアラーの研究や支援に取り組む立命館大の斎藤真穂教授(家族社会学)によると、進学や就職、結婚などに直面する18歳以降の当事者は、こうした感情を抱く傾向が強い。ケアの責任感が自身の可能性を諦めてし

(宮崎翔央)